

令和3年度 関東高校サッカー大会 埼玉県予選 大会総評

「西武台高校 6年ぶり8度目の栄冠」

報告者：高体連技術委員 庄和高校 野木 悟志

4月17日から29日にかけて令和3年度関東高校サッカー大会埼玉県予選が浦和駒場スタジアムなどの会場で開催された。今大会は、昨年度の全国高校サッカー選手権埼玉県予選ベスト8進出の7チーム（武蔵越生・正智深谷・西武台・武南・聖望学園・立教新座・細田学園）と、3月に行われた新人大会各支部予選から勝ち上がった32チームの合計39チームによるトーナメント方式で行われた（昌平は関東プリンスリーグ参戦のため、不参加）。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、埼玉県新人サッカー大会が中止となり、新チームとなって初めて臨む大会が本大会となった。優勝は西武台高校、準優勝に武南高校、3位に正智深谷高校と浦和西高校という結果となった。

優勝した西武台は、5試合で15得点無失点であり、攻守ともに安定感のある戦いぶりであった。12日間で5試合というハードスケジュールの中での大会であったが、試合を重ねるごとに選手間の連係が深まり、チームの成熟度が高まっていった。攻撃は、SBとSHを起点とするサイドからの崩しとクロスで相手ゴールに迫る。両SB⑤原田、③安木の積極的な攻撃参加が効果的であり、両SH⑩丸山、⑬山本へのサポート、コンビネーションでサイドを攻略し精度の高いクロスを供給するなど、多くの得点機を演出した。準決勝と決勝の貴重な先制ゴールは、サイド攻撃から奪った得点であり、まさに西武台の攻撃の特徴が表れた場面であった。また、相手チームがサイドへ人数をかけてきた状況では、OH⑦福沢を経由しながら中央突破を図るなど、相手を観ながら攻撃に工夫と変化を加えていた。そして、攻撃を牽引しチームを優勝へと導く活躍を見せたのが、FW⑰市川であった。ゴールへの嗅覚と得点感覚に優れ、2度のハットトリックを含む7得点を挙げ、ストライカーとして輝きを放った。守備は、前線と中盤で高い位置から連動した素早いプレスでボールを奪いにいくプレーが多く、特にボールを失った後の切り替えを早くすることで、相手からボールを奪い返し、チャンスにつなげる場面も多く見られた。相手のロングボールに対しては、空中戦に強い両CB④長谷川、⑥武笠がヘディングで跳ね返し、2nd ボールをボランチが素早く拾おうとする意識が高かった。決勝の前半では、武南のテンポの良いパスワークに前線からのプレスをかいくぐられ、押し込まれる時間帯があったが、集中した粘り強い守備でゴールを割らせなかった。相手に隙を与えず、今大会を無失点に抑えた守備は見事であった。また、途中出場ながら3得点を奪いチームの勝利に貢献したFW⑭細田を筆頭に、レギュラー陣とサブ組の力の差はなく、例年以上に選手層が厚い印象を受けた。今後、チーム内でのレギュラー争いがより一層激しくなることで個とチームの力は確実に高まっていくであろう。

準優勝の武南は、選手個々の高い技術をベースにパスサッカーのスタイルで接戦を制しながら決勝まで駒を進めてきた。準決勝の浦和西戦では、強度の高い守備の前に武南らしいパスワークは影を潜め、狙いとするような攻撃の形を作り出せない展開となった。さらに、

試合終了間際に同点に迫いつかれ、PK 戦までもつれた一戦となったが、苦しみながらも勝負強さを発揮し勝利を掴んだ。その戦いぶりから高校サッカー界において輝かしい歴史と実績を持つ伝統校としての“意地”と“プライド”をうかがうことができた。決勝の西武台戦の前半、ショートパスで攻撃のリズムを作りながら主導権を握り、試合を優位に進めた。中盤の底を務める MF②山田を軸にボールの出し入れを繰り返すことで、相手守備陣の隙やギャップを作りだし、OH⑭水野や1 トップ⑩櫻井へ効果的な縦パスを送る。巧みなドリブルで相手守備陣を突破する⑭水野、高い攻撃センスを発揮する1 トップ⑩櫻井で中央から攻撃を仕掛け、相手ゴールに迫った。得点こそ奪うことができなかったが、両者ともにプレーの随所に高いポテンシャルを感じさせる選手であった。今後、⑭水野と⑩櫻井のコンビネーションでの崩しや相手 DF ラインの背後を突くプレーが増えてくると、より攻撃力が高まっていくであろう。守備は、ゲームキャプテンである CB⑤中村を中心に堅実な守備組織を構築し、献身的なプレーで相手の攻撃を封じる。ボールに近い選手から積極的にチャレンジにいき、ボールを奪えるチャンスを逃さない。しかし、DF ラインの押し上げが遅く、全体が間延びしてしまうことで相手に有効なスペースを与えてしまい、ピンチを招いている場面も見られた。攻守の切り替えをより早くし、的確なラインコントロールでコンパクトな守備陣形を構築することができれば、守備の安定感が高まり、埼玉県でタイトルを獲得できるチームへと仕上がってくるであろう。

3 位の正智深谷は、ピッチを広く使い長短のパスを織り交ぜた攻撃とデュエルの強さをベースとした守備が特徴的なチームであった。準決勝の西武台戦の前半、GK を含めたビルドアップから攻撃を組み立てようとするが、相手にショートパスを狙われ、ボールを前進させることができなかった。後半に入ると、前線へロングボールを多く配給することで相手陣内へ進入し、サイドや中央から多彩な攻撃を仕掛けて好機をつくった。守備では、球際の強さを発揮しながら相手の攻撃に対応できていた時間帯もあったが、序盤での失点が響き準決勝敗退となった。今後、ゴール前の守備に集中力と粘り強さが出てくると、安定して好成績を残せるチームになるであろう。

同じく3 位の浦和西は、1・3・4・3 の布陣を引き、攻守ともに運動量が豊富でアグレッシブなサッカーを展開するチームであった。攻撃の優先順位を意識し、3 トップの質の高い動き出しに合わせてパスを送り、スピーディーかつ厚みのある攻撃から得点を奪いにいく。また、長身の選手が多く、ロングスローを含めたセットプレーは迫力があり、有効な得点源となっていた。守備は、高い位置から果敢にハイプレスをかける場面と、素早い帰陣で守備ブロックを形成する場面が見られ、状況に応じて守備の仕方を使い分けていた。準決勝ではPK 戦の末、惜しくも敗れた結果となったが、試合内容は互角以上の戦いを見せ、どちらに軍配が上がってもおかしくない好試合であった。攻守におけるゴール前のプレーの質が高まってくれば、拮抗した試合で勝ち切ることでできるチームになっていくであろう。

今大会を振り返ると、新型コロナウイルスの影響で限られたトレーニング時間や対外試合の中で迎えた大会となったが、強度が高く見応えのある好試合が多かった。そして、上位

に勝ち上がったチームは、攻守にハードワークし、球際に強く戦い、切り替えの早さが徹底されていた。大会序盤では、トレーニングと試合数不足の影響があり、個の力（上手さ、強さ、速さ）に依存する戦いやプレーが多く見られる傾向があったが、勝ち上がって試合経験を重ねていくにつれて選手間のイメージが共有され、チーム戦術とコンセプトの理解度が高まっていき、攻守において意図的かつ組織的なプレーが随所に見られるようになっていった。今後も新型コロナウイルスの影響を受けながらのトレーニングやリーグ戦の実施が予想される。そのような状況下で各チームが工夫した取り組みで確かな強化を図り、次の大会では攻守において強度と質の高い試合を繰り広げていてもらいたい。

今回優勝した西武台が第1代表として、準優勝の武南が第2代表として6月5日から山梨県で開催される関東大会に出場する。両チームともに県予選での成果と課題を整理して本大会に臨み、埼玉県代表として好成績を残すことを期待して総評とする。